

# ゆりかごの歌 ～幼竜の目覚め3～



透明な板はどうやら窓ガラスと呼ばれるものらしかった。それに、幼竜たちが部屋を出入りするときに開け閉めしていた板は扉というものらしい。

ここは人間が建てた小屋だったのだ。

ビビはそれを知ると、気味が悪くてその建物には入れなくなった。窓にぶつかった衝撃で気絶してしまったものの、目が覚めた瞬間に一目散に逃げ出し、近くにある小さな山の麓で休んでいた。

『ビビー！』

口口が庭を横切って走ってくる。庭といっても原っぱのようにとても広い。うさぎのようにぴょんぴょんと飛び、口口はビビの隣に座り込んだ。

『ここにいたんだね。もう窓にぶつかったところは痛くない？』

口口はそっとビビの額に触れようとたが、ビビはその手を素早くよけた。

『どうせわたちのこと馬鹿にしてるんでしょ？ほっといてよ』

『馬鹿になんかしてないよ。僕もここに来たばかりのときは同じことしたし。っていうかみんな最初は同じことしてるよ』

口口はしゅんとしたように長い耳を下げた。

ビビは短い手で額をさすった。正直なところ、まだ痛みは引いていないのだ。

しばらく2頭は無言でいた。風が冷たかった。もう冬になろうとしている時期だった。もし親とはぐれずにいたら、温かい巢の中で体を寄せあっている頃だ。父親と母親が交代で食べるものを捜しに行き、ビビは両親の愛情を一身に受けているはずだった。

『ねえ、そろそろおやつ時間だよ。一緒に小屋に戻ろうよ』

ビビはすくっと立ち上がると、小さな体を大きく見せるかのように精一杯手を振った。

『嫌！わたし人間なんて大っ嫌いよ！今じゃマーラ・ビビだって最低な人間だったんだと思うわ』

口口もビビをなだめようと、慌てて立ち上がった。

『そのマーラ・ビビって何なの？さっきも言ってたみたいだけど...』

『えっ...。口口、マーラ・ビビ知らないの？』

『う、うん...』

2頭はしばらくお互いの顔を見て黙りこんだ。やがて、ビビの目には涙が浮かびはじめ、あっという間にぽろぽろと流れ始めた。

『何も知らないのね！口口なんか人間に飼い馴らされて、竜じゃなくなっちゃえばいいのよ！』

『ち、ちょっと、なんでそんなに怒るの？』

ビビは口口の言葉には答えず、山の中へと入って行った。

ビビは孤独だった。

価値観を共有できる竜がない。

ここにいるのは竜の姿をした別の生き物だ。

そう思うとビビはたまらなく寂しかった。

ここにいると、自分もいつかは竜としての誇りを忘れて、呑気に生きていくことになるのだろうか。

そんなことを考えながらめちゃくちゃに山を走っていると、茂みを抜けた瞬間に固い枝にぶつかった。

『いったあー…。もう！ガラスといい何なの…』

文句を言いかけたビビは、枝を見上げた瞬間口をつぐんだ。鋭い牙を口にずらりと並べた老竜がビビを見ていたのだ。それは枝ではなく、2本の後ろ足で立つ老竜の脚だった。老竜は鋭い眼光でビビを射た。前足は少し小さいが後ろ足は良く発達しており、2本の足だけでかなり早く走れそうだった。頑丈そうな足には立派な爪までついており、ビビは硬直したまま動けなかった。

老竜はゆっくりとビビに近づく。

ビビは両親以外に大人の竜など見たことはない。恐怖に身を強張らせたまま、老竜を見つめた。

『ヒヨコ色の竜など久しぶりに見るな…』

『あ…あ…』

人間の罠にでも掛かったのか、老竜の脚には布が巻き付けられていた。

爪のついた恐ろしい脚を動かし、徐々にビビに近づく。

『うまそうな色してるじゃないか』

『や…っ。嫌！』

反射的にビビは走り出した。わけもわからず狭い道を選び、木々の間を走り回る。

あれも竜なのだろうか。

この山には恐ろしい生き物がいるらしい。

ビビは死に直面して無我夢中になっていた。

あのまま動けずにいたら今頃どうなっていたのだろうか。

気がつくとも小山をずっと登って来ていた。あの狂暴そうな2本足の竜が襲ってくる気配もなく、あたりは平和そのものである。

ビビは少しずつ冷静になっていった。人間の巣に戻るなどまっぴらである。そうなれば、どうしたってこの山で暮らさなくてはならない。この山で暮らしていくために必要なものは何か。寒くなってきているので、風を凌げる場所も探さなくてはならない。初めて来る土地なのでわからないことだらけだった。それでも父親なら安全な場所を探しだしただろう。母親ならおいしい木の実をたくさんとってきてくれただろう。同じ血が自分にも流れているのだ。幼いとはいえ竜である。

自分にもできないはずがない。

ビビは小さな足で歩き回った。

山は思ったよりも高くなく、危険そうな場所もあまりなかった。ただし、大人の竜なら安全なところでも、小さな子どもの竜にとっては危険が潜んでいることもある。油断しないように緊張の糸を張りながらビビは歩き続けた。

やがて小山の頂上付近まで来ると、大きな岩を発見した。

『すごい！パパよりも大きいかもしれないわ！』

ビビは思わず叫ぶと、短い手足で一生懸命よじ登った。岩の前や上にある木々はちょうど開けており、ふもとの景色がきれいに見渡せた。高い山ではないので絶景とまではいかないが、あの人間の巣もよく見える。ここから見張っていれば、人間が万が一襲って来ようとしてもすぐに逃げ出せるだろう。人間の巣の前には、先ほどビビが走ってきた大きな原っぱが広がっており、年老いた竜からビビと同じ年頃の竜まで様々な竜が歩いていた。草を食べもの、追いかけて遊ぶもの、気ままに散歩するもの。皆思い思いの時間を楽しんでいる。

『原っぱには危険な竜はいないのかしら...』

ビビはの2本足の竜を思い出しながら呟いた。マールン以外の竜を見たことはないが、原っぱにいる竜は皆大人しそうである。そうになると、やはり2本足の竜のような狂暴な竜は山に隠れており、ときどき獲物を狙って原っぱに下って行くのだろう。

自分の身は自分で守らなくてはならない。

ビビは身軽に岩から飛び降りると、近くにある茂みに潜り込み、地面に穴を掘り始めた。ビビの爪はまだ弱々しく、深い穴を掘ることはできないが、半分でも身を隠すことができれば、もう半分は茂みが隠してくれる。

『これでよしと』

ビビはしばらく完成した穴を満足げに眺めていたが、そのうちに中に入って身を埋めてみることにした。

『うーん...ちょっと狭いわ...』

これからもっともっと立派な巣にしていかななくては。

ビビはこれからの計画を立てると同時に、初めて作った自分の巣も悪くないと思った。

『ママ、パパ、わたしちゃんと頑張ってるよ...』

ビビは返事のない相手に小さな声で報告すると、さっそくお手製の巣の中で丸くなった。次第に眠気が訪れる。

今日はいろいろなことが一度にありすぎて疲れてしまった。

少しは休息をとらないと、明日からまた人間と戦えなくなってしまう。

ビビはゆったりと目を閉じ、やがて深い眠りについた。

\*\*\*\*\*

どこからか草木を揺らす音が聞こえる。

何かが落ち葉を踏みしめて歩き回っているようだ。

ビビは半分眠ったまま何の音なのかぼんやりと考えていた。そのとき、すぐ側から深いため息が聞こえた。反射的に体が強張る。

『な、何...?』

そっとあたりを見回すが真夜中なので何も見えない。

しかし、誰かの息遣いが聞こえたのは確かだ。それも、とても大きい動物の息遣いだ。泣くもんか。

誇り高きマールンなんだから。

ビビは気持ちを強く持ち、わずかな茂みの隙間から外を伺った。

『！！』

思わず叫びそうになるのを必死で堪える。暗闇に金色の瞳が浮かび上がっていたのだ。猛獣の目である。夜行性なのか、皆が寝静まった頃に獲物を探すつもりなのだろう。だが、幸いにもビビには気づかなかっただけで、やがて方向を変えると、脚を引きずりながら歩き始めた。よく見ると、右足に白い布を巻いている。

『に、2本足の...！』

昼間に会った竜だと気づいた瞬間、ビビの体は震え始めた。2本足の竜は歩きながらも近くの木の根元や茂みの中を覗きこんでいる。

『わ、私たちを探してゆんだわ...』

ビビはすっかり怯えきってしまい、混乱せずにはいられなかった。なぜ自分を探しているのか。

やはり捕まったら食べられてしまうのだろうか。

声を上げて泣き出したかった。

誰かに助けを求めたかった。

しかし、どちらも今のビビには叶わない。

ただただ恐怖に震えながら、縮こまって朝を待つことしかできなかった。

\*\*\*\*\*

『ねえ、ビビ、いつまで寝てるのー？』

次に目が覚めたときにはすっかり日が高く上っていた。

『ようやく起きた？』

『きゃああああっ！』

ビビは驚いて飛び起きた。そして同じように、起こしに来た口口も飛び上がって驚いた。

『ど、どうしたの？そんなにびっくりして...』

『ご、ごめん...』

ビビは高鳴る鼓動を鎮めながら、ゆっくりと周りを見回した。

『あ、あれ？もう朝になってゆ...』

『朝っていうかもう昼だけどね。よくこんなところでひとりで眠ったね。怖くなかった？』

『そりゃあ...』

すごく怖かった、と言いかけてビビは口をつぐんだ。

なんだか人間と暮らす幼竜たちに負けたような気がして言えなかったのだ。

『もちろん怖くなかったわよ。わたし、ついこの前まで野生の竜として暮らしてたのよ』

『それもそうか。でもお母さんがいないと心細くなかった？』

『別に心細くないわよ。ただ...』

これ以上嘘を重ねると本心が漏れそうなので、ビビは話題を変えた。

『人間みたいな竜がいたわ』

『人間みたいな？』

『2本足で歩くの。それに目も光ゆの』

『人間の目は光らないよ』

『えっ。人間って肉食獣じゃないの？』

ビビは強がるのも忘れて目を見張った。

『人間は何でも食べるよ。ペアさんなんて好き嫌いないしね』

口口は当たり前かのように言ったが、ビビには恐怖でしかなかった。

何でも食べるだなんて、今まで以上に気を付けなければならない。

そんなビビの不安など知る由もなく、口口は明るく言った。

『それよりさ、おなかすいたでしょ？ペアさんがごはん作ってくれたから小屋に行こうよ』

『な、何言ってゆのよ！人間が作ったごはんなんて何が入ってゆかわからないじゃないの！』

『大丈夫だよ。木の実とかミルクとかばっかりだよ。それに小屋の中はあったかいよ』

『小屋って人間の巣のこと？』

『うん』

『嫌よ！あんな気味の悪いところもう戻りたくないわ！』

ビビは透明な板一窓ガラスにぶつかったときのことを思い出した。

きっと他にもああいう危険なところがあるに違いない。

今度はどんな目に遭うかわかったものではない。

『でも...ごはんどうするの？ビビ、昨日から何も食べてないんじゃないの？』

空腹なのは事実だった。もはや空腹という感覚を通り越して、腹痛まで起き始めている。しかしプライドの高いビビは、またも無理に強がった。

『食べるものくらい自分で見つけゆわよ。この前までそうしてたんだし』

『そうかもしれないけど...』

野生で暮らしているとき、食べ物を探してくれたのは親である。口口はビビより少し大きいので、自分たち幼竜が如何に非力が知っていた。ビビひとりでは食べ物を探すことなど到底無理であろう。自分が手伝ったところで大して見つかると思えないが、ビビをひとりにするのも心許ない。

『僕も一緒に行っちゃだめ？ここに来て長いんだけど、ひとりだと行けないところがまだいっぱいあるんだ。でもビビとなら行ける気がする』

『そうなの？』

ロロがビビのプライドを尊重しながら言ったので、ビビもまんざらではなさそうだ。  
満足そうに胸を張ると、ビビは元気に立ち上がった。

『それじゃあさっそく探険に行こ！わたし昨日一通り見て回ったから、いろいろ教えてあげ  
ゆわ』